

宮城県志津川町方言の名詞のアクセント

——音節単位によるモーラ方言の分析——

大西拓一郎

要 旨

宮城県志津川町方言は音韻の面から見た場合モーラを単位とした方言であると考えられる。しかし、アクセントについてはその標識(\uparrow)を置く単位をモーラにとった場合、さまざまに不合理な点や矛盾が生じ、音節(シラブル)にとった方がより合理的な解釈が可能である。そのように音節を単位とした場合、制限はあるものの、 n 音節語には $n+1$ 個のタイプの区別が見られる。

しかし、音節を単位とするといってもそこにモーラ単位的な性格が認められないわけではなく、特に短音節と長音節との違いが問題になる。その問題点を明らかにした上で、やはり以前から音節単位的性格が指摘されてきた東京方言と比較して、志津川町方言の方がより音節単位性の強いことを明らかにした。

また、当該方言には無標の語にも音韻的には無意味な下がる音調が現れるが、この音調もやはり音節を単位としている点からも音節単位による扱いが妥当であることがわかる。

1. はじめに

宮城県本吉郡志津川町^{注1}方言は柴田武(1962)の考え方に従うならば、後述するように分節音としての音韻の面からはモーラを単位としたモーラ方言であると考えられる。しかし、本稿では、それにも関わらず、名詞のアクセント体系についてモーラではなく、音節(シラブル)を単位として記述されるべきことを中心に述べる。

宮城県内の方言アクセントは南部に無アクセント地帯がひろがり、あいまいアクセントの地域をはさんで、北部には有アクセントの方言が分布している。平山輝男(1957)はこの一帯の有アクセント方言を特殊音調IIとし、志津川町方言のアクセントは、直接の調査地点ではないもののこの特殊音調IIの地域に含めている。また、佐藤亮一(1966)によってアクセントの言語地理学的調査の一地点として扱われたこともある。いずれにせよ、東北地方の有アクセント地帯の最南端の地域にあたり、無アクセントとのつながりが重視されるにも関わらずまだ十分な記述はなされていない。

本稿の記述は主に大正7(1918)年生まれ^{注2}のKS氏の発話に基づく。氏は兵役の4年間を除いて志津川町の中心部、五日町の在住である。その他に幾人かの話者にも調査に協力してもらった。多少の語彙的な相違はみられたものの体系上の違いは認められなかった。

なお、調査は1986年8月から1988年11月まで幾度かにわたって現地へ赴いて行なったものである。

2. 標 識

語単独発話の実質は基本的に次のようである。

(1)

毛。ケ ¹	水。ミ ^{注2} ズ	釣瓶。ツル ¹ ベ	腰掛。コスカ ¹ ゲ
火。ヒ ¹	春。ハ ¹ ル	夕べ。ユ ¹ ーベ	満月。マ ¹ ンケ ¹ ツ
蚤。ノ ¹ ミ ¹	兎。ウ ¹ サ ¹ キ ^{注3}	紫。ム ¹ ラ ¹ サギ	
	暦。コヨ ¹ ミ ¹	松茸。マズ ¹ ダ ¹ ゲ	
		朝顔。アサカ ¹ オ ¹	

(¹は前のモーラから次のモーラにかけての音調の上がり、¹は下がり、¹は前のモーラ内での下降を示す。上がり、下がりの幅はここでは問わない。)

助詞「も」を付け、言い切り発話をしてもらい調査すると基本的に次のようである。

(2)

毛も。ケ ¹ モ	水も。ミズ ¹ モ	釣瓶も。ツルベ ¹ モ	腰掛も。コスカゲ ¹ モ
火も。ヒ ¹ モ	春も。ハ ¹ ルモ	夕べも。ユ ¹ ーベモ	満月も。マ ¹ ンケ ¹ ツモ
蚤も。ノ ¹ ミ ¹ モ	兎も。ウ ¹ サ ¹ キ ¹ モ	紫も。ム ¹ ラ ¹ サギモ	
	暦も。コヨ ¹ ミ ¹ モ	松茸も。マズ ¹ ダ ¹ ゲモ	
		朝顔も。アサカ ¹ オ ¹ モ	

(2)を(1)と較べると上から1列目の下がりの位置が2モーラ以上の語で1モーラ分後ろにずれていることがわかる。

次に助詞「も」がついて文頭に置かれたとき、つまり後に述部がついた場合、上から2列目以下は(2)に同じであるが、1列目は次のようになる。(「も」より後は“…”で省略して示す。)

(3)

毛も… ケモ… 水も… ミズモ… 釣瓶も… ツルベモ… 腰掛も… コスカゲモ…

このように(1)(2)に示した1列目の下がりには消える。このことから1列目にみられた下がりには発話句中の位置によって現れるもので1列目の語に常に現れるというものではないことがわかる。

さらにこの下がり(1)(2)の言い切り発話にあっても消えることがある。すなわち、

(4)

毛。ケ ¹ ~ケ	水。ミ ¹ ズ~ミズ	釣瓶。ツル ¹ ベ~ツルベ
腰掛。コスカ ¹ ゲ~コスカゲ	毛も。ケ ¹ モ~ケモ	水も。ミズ ¹ モ~ミズモ
釣瓶も。ツルベ ¹ モ~ツルベモ	腰掛も。コスカゲ ¹ モ~コスカゲモ	

の“~”の左右はゆれであり対立するものではない。これまでは“~”の左の形を示していたが、“~”の右の形も許されるわけである。このことから(1)(2)の1列目に関して下がりの有無は音韻的には無意味であることがわかる。

(38) 宮城県志津川町方言の名詞のアクセント

(2)の3列目以下は、「も」付き言い切り発話で示すと次のように現れることもある(文頭で述部が後続する場合もこの形に準ずる)。

(5)

蚤も。ノミ[゛]モ 兎も。ウサ[゛]キ^ゝモ 紫も。ムラ[゛]サギモ
曆も。コヨミ[゛]モ 松茸も。マズダ[゛]ゲモ
朝顔も。アサカ^ゝオ[゛]モ

(5)を(2)と較べればわかるように下がりの前の上がりが消えた形も許される。このように(1)(2)の3列目以下にみられる下がりの前の上がりの有無は音韻的対立に関与しない。このことから当該方言では下がりをアクセントのタイプ区別の標識として/[゛]/のように設定すればよいことがわかる。そこで以上に掲げてきた語例によって標識の分布を示すと次のようになる。

(6)

/毛ケ 水ミズ 釣瓶ツルベ 腰掛コスカゲ
火ヒ[゛] 春ハ[゛]ル タベユ[゛]ーベ 満月マ[゛]ンケ^ゝツ
蚤ノミ[゛] 兎 ウサ[゛]キ^ゝ 紫 ムラ[゛]サギ
曆 コヨミ[゛] 松茸マズダ[゛]ゲ
朝顔アサカ^ゝオ[゛]/

これだけだと東京方言によく似ているが、(1)~(4)に示したようにその実質は必ずしも同じではない。それに無標の語にも下がりが見られることから音調の下がりか常に標識だとは限らない点にも注意しなければならない。なお、このように標識が/[゛]/であることが明確に記述された方言は、管見の及ぶ範囲では、東北地方には見当らない。東北地方の方言アクセントの標識で現在証明されているものは、1音節卓立型か、もしくはいわゆる上り核(/[゛]/)であり、/[゛]/で記述されているものはあるが、これらは/[゛]/が標識であることを証明した上で記述しているのではなく、/[゛]/が標識であることを前提にして行なっているようである。

3. 標識を置く単位

今、標識を置く単位をとりあえずモーラとして記述を進めたのであるが、そのようにモーラを単位とした場合次のような問題が起ってくる。モーラ音素(二重母音後半の/-e/(当該方言では/-i/との区別はない)、撥音/N/, 長音/R/, 促音/Q/)をM、それ以外のモーラを0としてモーラ音素を含む語における標識の分布を示す。

(7)

0 M	0 M 0	0 0 M	0 M 0 0
/晩バン	股 マッタ	値いアダエ	幸福コーフグ
鯉コ [゛] エ	今夜コ ^ン ヤ	-----	サ [゛] ーカス
-----		地面ズメ ^ン	-----
	蚕 カエゴ [゛]	-----	札幌サツポ [゛] ロ
			恋人コエビド [゛] /
0 0 M 0	0 0 0 M		
/病人ヤマエド	復習オサラエ		
-----	-----		
鶯 オコ [゛] エス	板前エダ [゛] マエ		
-----	魂 タマス [゛]		
弟 オドード [゛]	-----/		

モーラ音素を持つ語について標識の分布を見るとモーラ単位ではこのようにあきまが見られる。そしてそのあきまには2種類あることがわかる。

第1種のあきまは3列目以下に規則的に現れる——で示したものである。これはモーラ音素が/゛を担えないことによるものである。当該方言ではモーラ音素が標識を担う例は今のところ見出されていない。すなわち [(C)V[゛]M] : [(C)VM[゛]] というようにモーラ音素の前後で標識が対立する例は今のところ見つかっていない。このことからモーラではなく音節を標識を担う単位として解釈することにより——のあきまを解消するように記述できる。つまりモーラ音素はそれのみでは独立した音節にはなれず、直前のモーラといっしょに1音節を構成し、当該方言ではそのような音節が単位となって標識を担うと記述するわけである。いまsで短音節(1モーラ=1音節)を、Sで長音節(モーラ音素を含む音節、すなわち(C)Ve, (C)VN, (C)VR, (C)V[●])を表わすと次のようになり前述の通り——のあきまは解消される。

(8)

S	Ss	sS	Sss
/晩バン	股 マッタ	値いアダエ	幸福コーフグ
鯉コ [゛] エ	今夜コ ^ン ヤ	-----	サ [゛] ーカス
	蚕 カエゴ [゛]	地面ズメ ^ン	札幌サツポ [゛] ロ
			恋人コエビド [゛] /
sSs	ssS		
/病人ヤマエド	復習オサラエ		
-----	-----		
鶯 オコ [゛] エス	板前エダ [゛] マエ		
弟 オドード [゛]	魂 タマス [゛]		

しかし、こうしても2列目に見られる-----で示したもう1種のあきまは解消されない。これは標識を担う単位がモーラか音節かといったことにより生じるあきまではないからで

(40) 宮城県志津川町方言の名詞のアクセント

ある。長音節を1個有する2音節語(=モーラ単位で言えば3モーラ語)以上に長い語は語頭の短音節に標識を担えないという制限によるものである。このことを、2.に述べた点も総合して図示するならば次のようになる。

(9)

/s	S	ss	Ss	sS	sss	Sss	sSs	ssS
s ¹	S ¹	s ¹ s	S ¹ s	S ¹ ss
		ss ¹	Ss ¹	sS ¹	ss ¹	Ss ¹ s	sS ¹ s	ss ¹ S
					sss ¹	Sss ¹	sSs ¹	ssS ¹ /

このようにSsの組み合わせから右では短音節が語頭にある語には頭高型がないことがわかる。そしてここに現れるあきま……は何らかの相補分布を示すものではないから、理論上の組みかえで埋めることはできない。

先にモーラ音素が標識を担うことはないというのを [(C)V¹M] : [(C)VM¹] の対立のないことに基づいて言った。この点について音調の実質に基づいて説明を補っておく。長音節が標識を担っているとき次のようなゆれを示す。音調の実質で示す。

(10)

鯉もコ¹エモ〜コエ¹モ, 今夜コ¹ンヤ〜コン¹ヤ,
地面もズ¹メンモ〜ズ¹メン¹モ, サ¹ーカス〜サ¹ーカス,
鶯オ¹コ¹エス〜オ¹コ¹エ¹ス, 魂もタマ¹ス¹ーモ〜タマ¹ス¹ーモ

“〜”の右に示したようにモーラ音素の直後に下がりがあるように発話されることがある。実際はむしろこの形の方が自然会話ではよく聴かれる。話者にとっては [(C)V¹M] (すなわち、モーラ音素の直前で下がる、例えば[オ¹コ¹エス])の形よりも [(C)VM¹] (すなわち、モーラ音素の直後で下がる、例えば[オ¹コ¹エ¹ス])の方が自然な形なのかもしれない(但し、Mが/Q/の場合はその限りではない)。^{注7}

このように [(C)VM¹]の方が自然ならば、当該方言ではモーラ音素が標識を担うということになるかという点も早田輝洋(1968, 1986)も主張するように [(C)V¹M]と [(C)VM¹]が対立してはじめてモーラ音素が標識を担うと言い得るわけで、そうはならない。当該方言では [(C)V¹M]と [(C)VM¹]はゆれとして現れるもので音韻的に対立するものではない。ゆえに音節を、標識を置く単位として記述することによってこそ合理的な解釈がなされる。

なお、末尾の長音節が標識を担う場合 (/…S¹/), 語単独発話では下がる音調のゆれは生じない。すなわち「鯉。」[コ¹エ], 「地面。」[ズ¹メン], 「魂。」[タマ¹ス¹ー]のみであって、* [コエ¹, ズ¹メン¹, タマ¹ス¹ー]はない。末尾の短音節が標識を担う場合 (/…s¹/)は語単独発話で音節内下降が現れるが(例えば、「火。」[ヒ⁰], 「蚕。」[ノ⁰ミ⁰], 「暦。」[コヨ⁰ミ⁰])上に示した長音節末尾のモーラ間の下がりは短音節末尾に平行して音節内下降として記述すればそれで済み、この点でも音節単位の方が簡潔である(この点については後で再び触れる)。

4. 体系と検証

以上のように志津川町方言の名詞のアクセントは、標識は下がる音調であり、それを置く単位は音節であることが明らかとなった。そして各音節数の単語におけるアクセントのタイプ数は n 音節の語について $n+1$ 個認められる ($P_n=n+1$)。但し、いわゆる頭高型には制限がある。このことを○で音節を表わして図示すると次のようになる。標識の有無と前から何音節目に標識を置くかを左端に数字で示す。

(11)

①:	○	○○	○○○	○○○○	-----
①:	○ ^ˊ	○ ^ˊ ○	◎ ^ˊ ○○	◎ ^ˊ ○○○	----- (◎は長音節に限られる ^{注8})
②:		○○ ^ˊ	○○ ^ˊ ○	○○ ^ˊ ○○	-----
③:			○○○ ^ˊ	○○○ ^ˊ ○	-----
④:				○○○○ ^ˊ	-----
⋮					⋮

このような体系に対してモーラ単位でも同じ体系ができるのではないかという意見ができるかもしれない。なるほどモーラを○で表わしても(11)と似たものはできあがる。しかし、その体系は背景に(7)に——で示したあきまを含んだままのものであることはいうまでもない。さらに長音節が標識を担う語の認定に問題が生じてくる。これらの語では(10)に示したようにゆれがある。このゆれは当該の語のタイプ別の認定に影響を及ぼす。すなわち、「今夜」[コ^ˊンヤ～コン^ˊヤ]=① or ②?, 「鶯」[オ^ˊコ^ˊエス]～[オ^ˊコ^ˊエ^ˊス]=② or ③?…等々。

また、同様にモーラ単位で次のように記述する方法も考えられよう。それは(11)に◎で示したような頭高型への制限に注目する記述方法である。このような制限が生じてくるのは(7)～(9)に……で示したようなあきまが存在することによるものである。ここでモーラ音素が標識を担えない点に目をつぶって(すなわち(7)のあきまはそのままとして)、先にも述べたように [(C)V^ˊM] よりも [(C)VM^ˊ] のほうが自然である点に注目してモーラ単位で、「今夜」[コ^ˊンヤ]=②, 「鶯」[オ^ˊコ^ˊエ^ˊス]=③, 「魂」[タマ^ˊスー^ˊモ]=④のようにして記述する方法を考えてみる。すると次のような体系が考えられよう。ここでは●でモーラを表わす。

(12)

①:	●	●●	●●●	●●●●	
①:	● ^ˊ	● ^ˊ ●	=====	=====	
②:		●● ^ˊ	●●● ^ˊ	●● ^ˊ ●●	
③:			●●● ^ˊ	●●● ^ˊ ●	
④:				●●●● ^ˊ	

つまり体系自体にあきま(ここでは=====で示した)があるということになりタイプの数

が m モーラの語に 2 モーラまでは $m+1$ 個, 3 モーラ以上では m 個というかたよった体系が形作られる ($P_m=m+1, m \leq 2; P_m=m, m \geq 3$)。このようにモーラ単位では整った体系は得られない。しかし、一方で整った体系が得られないのはまさにこの方言が歴史的に過渡期にあるからだという解釈もなされよう。すなわち無アクセント化へ向けて型の数を減らしているのだという解釈である。このこと自体は興味深いことであるが、(11)に示した制限でも当該方言が有する通時的な問題は充分に推測されるはずである。さらに先にも述べたように語末モーラ音素(音節単位では語末長音節)に標識を置く語においては語単独発話では「鯉。」[コ¹エ], 「地面。」[ズ¹メン], 「魂。」[タマ¹スー] の形で上がる音調(´)の消えることはあっても下がる音調のゆるむことはなく, 「鯉は [コエ¹モ] により②であるが, 語単独では [コ¹エ] のように 1 モーラ前に標識が移る。地面 [ズ¹メン¹モ/ズ¹メン], 魂 [タマ¹スー¹モ/タマ¹スー] 等も同様に扱う」といったように, たとえ規則により指定は可能であるにせよ, モーラという自ら設定した単位を越えての音調の指定が必要である。以上の点からモーラ単位によるこの記述方法もやはり不合理である。

このようにアクセントの単位としてモーラではなく音節単位が設定されるのであるが, 実はこの単位は話者の分節意識の単位と一致するわけではない。例えば, /N/, /R/, /Q/ については, 他のモーラに較べて短いという話者自身の内省があり, 独立性が弱いようであるが, /-e/ については必ずしもそういう内省はないようだ(但し, /-e/ も実際には持続時間は短く聴かれる)。そして, またすべて「一音」として意識されてもいる。モーラ音素のすづまり加減は幾分シラビーム的(柴田, 前掲)ではあるが, 北奥方言ほど明確で, かつ話者の意識のレベルにまでシラビームの性格の及んでいるものではない。つまり, 音韻の面からすればモーラ方言(柴田, 前掲)と考えられるわけで, 上に考えてきたアクセントの音節単位とは必ずしも一致しない。その点を考慮しても当該方言のアクセントをモーラ単位で記述した場合, 上に示したように様々な不合理な点や矛盾が生じ, やはり, より合理的な音節単位を認めざるを得ないのである。

しかし, 実はそれにも関わらずアクセントにおいてもモーラ単位的性格がまったく認められないわけではない。つまり上野善道(1984, 1986)の述べるように音節単位とモーラ単位とはきれいに二分できるものではなく, その間の連続的なスケールの中に位置付けるべきものと考えた場合, 当該方言はそのスケールの上で, かなり音節的性格は強いものの, 幾分モーラ寄りの性格が認められるということである。その点について次に述べる。

5. 短音節と長音節

助詞「の」は短音節末尾の単語に付いた場合, 1音節語以外ならば直前の音節の/´/を消す。1音節語ならば消さない。例えば次のようである。

(13)

/s ¹	ss ¹	sss ¹	ssss ¹ /
火ヒ ¹	蚤ノ ¹ ミ ¹	曆コヨ ¹ ミ ¹	朝顔アサカ ¹ オ ¹
ヒ ¹ ノ	ノミノ	コヨミノ	アサカ ¹ オノ

有標の長音節を末尾に持つ語では次のようである。

(14)

/S ^ˈ	sS ^ˈ	ssS ^ˈ	sssS ^ˈ /
恋コ ^ˈ エ	境サ ^ˈ ガ ^ˈ エ	頃合いコロ ^ˈ ア ^ˈ エ	表替えオモデ ^ˈ カ ^ˈ エ
コ ^ˈ エノ	サガエノ	コロアエノ	オモデカ ^ˈ エノ

(13)と(14)とを較べると標識を担う長音節が末尾にある場合も短音節の場合に平行して2音節以上の語では「の」が付くと直前の/ˈ/を消すことがわかる。ここでは/-eˈ/の例を挙げたが/-e/以外の他のモーラ音素で形成された長音節が末尾にある場合も同様である。これは音節単位としたからこそ「の」付きの音調が指定できたのである。モーラ単位ならば語単独発話により「恋。」[コ^ˈエ]と「春。」[ハ^ˈル]、「境。」[サ^ˈガ^ˈエ]と「兎。」[ウ^ˈサ^ˈキ]、「頃合い。」[コロ^ˈア^ˈエ]と「松茸。」[マズ^ˈダ^ˈゲ]、それに「表替え。」[オモデ^ˈカ^ˈエ]と「腕まくり。」[ウデマ^ˈグ^ˈリ]はそれぞれ同じタイプの音調と見なされるかも知れない。しかし、「の」が付くと、

(15)

春ハ ^ˈ ル/ハ ^ˈ ルノ	兎ウ ^ˈ サ ^ˈ キ/ウ ^ˈ サ ^ˈ キノ
松茸マズ ^ˈ ダ ^ˈ ゲ/マズ ^ˈ ダ ^ˈ ゲノ	腕まくりウデマ ^ˈ グ ^ˈ リ/ウデマ ^ˈ グ ^ˈ リノ

のようであって、上に挙げたそれぞれのペアの後のもの(=短音節末尾のもの)は音調の下がりは消えない。つまり(「恋」[コ^ˈエ]と「春」[ハ^ˈル]を除いて)「境」[サ^ˈガ^ˈエ]と「兎」[ウ^ˈサ^ˈキ]、「頃合い」[コロ^ˈア^ˈエ]と「松茸」[マズ^ˈダ^ˈゲ]等をそれぞれモーラ単位により同等に扱うわけにいかなくなる。

次に助詞「まで」が付いた場合は末尾の短音節に置かれた下がりは次のように「まで」に移る。

(16)

/s ^ˈ	ss ^ˈ	sss ^ˈ	ssss ^ˈ /
火ヒ ^ˈ	蚤ノ ^ˈ ミ ^ˈ	暦コヨ ^ˈ ミ ^ˈ	朝顔アサカ ^ˈ オ ^ˈ
ヒ ^ˈ マ ^ˈ デ	ノミ ^ˈ マ ^ˈ デ	コヨミ ^ˈ マ ^ˈ デ	アサカ ^ˈ オ ^ˈ マ ^ˈ デ

末尾の長音節に標識が置かれていると解釈される語に付くと次のようになり(16)に平行する。

(17)

/S ^ˈ	sS ^ˈ	ssS ^ˈ	sssS ^ˈ /
恋コ ^ˈ エ	境サ ^ˈ ガ ^ˈ エ	頃合いコロ ^ˈ ア ^ˈ エ	表替えオモデ ^ˈ カ ^ˈ エ
コエ ^ˈ マ ^ˈ デ	サガエ ^ˈ マ ^ˈ デ	コロアエ ^ˈ マ ^ˈ デ	オモデカ ^ˈ エ ^ˈ マ ^ˈ デ

一方、末尾から2音節目(次末音節)に標識があるものでは、

(44) 宮城県志津川町方言の名詞のアクセント

(18)

/s ^ˊ s	ss ^ˊ s	sss ^ˊ s	ssss ^ˊ s/
春ハ ^ˊ ル	兎ウ ^ˊ サ ^ˊ キ ^ˊ	松茸マズ ^ˊ ダ ^ˊ ゲ	腕まくりウデマ ^ˊ グ ^ˊ リ
ハ ^ˊ ルマデ	ウ ^ˊ サ ^ˊ キ ^ˊ マデ	マズ ^ˊ ダ ^ˊ ゲマデ	ウデマ ^ˊ グ ^ˊ リマデ

のようになり末尾の長音節が標識を担うものとは対立する。つまり語末の/(C)V^ˊM/(=/(C)VM^ˊ/)と/(C)V^ˊ(C)V/とは機能が異なることがわかるのである。

それでは以上のケースにおいて長音節と短音節とをまったく同様に扱っていいのかとなると問題が残されている。それは次のようなゆれのみられることである。

末尾の長音節に標識を置く(/…S^ˊ/)2音節以上の語に「の」が付いた場合(14)に示した形には実はゆれがある。

(19)

境	サガエノ～サ ^ˊ ガ ^ˊ エノ
頃合い	コロアエノ～コロ ^ˊ ア ^ˊ エノ
表替え	オモデカ ^ˊ エノ～オモデ ^ˊ カ ^ˊ エノ

“～”の右側の形も許される。つまり下がりの消えない形も許されるのである。末尾が短音節有標の語(/…s^ˊ/)では(13)に示した形でゆれはまず生じないから短音節と長音節とで違いがあることになる。

「まで」も同様の問題があり、末尾が長音節有標の語では、

(20)

恋	コエ ^ˊ マ ^ˊ デ～コ ^ˊ エマデ
境	サガエ ^ˊ マ ^ˊ デ～サ ^ˊ ガ ^ˊ エマデ
頃合い	コロアエ ^ˊ マ ^ˊ デ～コロ ^ˊ ア ^ˊ エマデ
表替え	オモデカ ^ˊ エ ^ˊ マ ^ˊ デ～オモデ ^ˊ カ ^ˊ エマデ

のようにゆれがあり“～”の右のように/^ˊ/が「まで」に移らない形も許される。¹¹もつとも「…まで」の場合は末尾が短音節有標の語でも稀に、

(21)

火	ヒ ^ˊ マ ^ˊ デ～ヒ ^ˊ マデ
蚤	ノミ ^ˊ マ ^ˊ デ～ノ ^ˊ ミ ^ˊ マデ
暦	コヨミ ^ˊ マ ^ˊ デ～コヨ ^ˊ ミ ^ˊ マデ
朝顔	アサカ ^ˊ オ ^ˊ マ ^ˊ デ～アサカ ^ˊ オ ^ˊ マデ

のようにゆれることがあるから、この場合は長音節も短音節もその違いは程度差に過ぎないと言えるかも知れない。

以上のように当該方言のアクセント体系はモーラ単位で記述するよりも音節単位で記述する方が合理的であることは明白なのであるが、長音節と短音節とはまったく同じく機能するものではない。このことはすなわち音節単位とはいってもモーラ的色彩がまったくないわけではないことを意味する。つまり、(19)(20)のようにゆれるということは、ゆれの一端は、音節単位から見れば、そこに(13)と(14)、(16)と(17)の間に見られる先に述べた

ような平行関係が認められることになるが、その一方で、モーラ単位から見れば、そこに次のような“**↑↑**”で示した平行関係も認められるということである。

(22)

/ 0 ⁰	0 0 ⁰	0 0 0 ⁰	0 0 0 0 ⁰ /
春ハ ^ル	兎ウ ^サ キ [°]	松茸マズ ^ダ ゲ	腕まくりウデマ ^グ リ
ハ ^ル ノ	ウ ^サ キ ^ノ	マズ ^ダ ゲノ	ウデマ ^グ リノ
ハ ^ル マデ	ウ ^サ キ ^{マデ}	マズ ^ダ ゲマデ	ウデマ ^グ リマ
↑↑	↑↑	↑↑	↑↑
/ 0 ^M	0 0 ^M	0 0 0 ^M	0 0 0 0 ^M /
恋コ ^エ	境サ ^ガ エ	頃合いコロ ^ア エ	表替えオモデ ^カ エ
コ ^エ ノ	サ ^ガ エノ	コロ ^ア エノ	オモデ ^カ エノ
コ ^エ マデ	サ ^ガ エマデ	コロ ^ア エマデ	オモデ ^カ エノ オモデ ^カ カマデ

もし当該方言のアクセントの単位が完全に音節単位であるとすればこのようなことはないはずである。先に述べた音節とモーラとのスケールの上で考えた場合、当該方言は音節的性格は強いが、完全な音節寄りではなく、幾分モーラ寄りの方言として位置させるべきなのであろう。このスケールという観点から例えば、やはり以前から音節的性格が指摘されてきた東京方言^{注12}と較べるならば次のように言える。

まず、モーラ音素が標識を担わないという点において、(7)に——で示したあきまの存在する点は共通する(東京方言の音節的性格はこの点を一番の根拠として言われてきた)が、志津川町方言はモーラ音素上に下がりがある形の方が自然と考えられる点で、音節単位の基底からいっそう単純に表層へ導き出し得るものである。またこのことに関連するが、志津川町方言が [(C)V^M] ~ [(C)VM[°]] のゆれを許容することはモーラ単位は越えるけれども音節内のゆれとしては許容していることに他ならず、この点でもいっそう音節的である。特に3.の後半及び4.でも指摘したように、語末に有標の長音節がある場合、語単独では [(…C)V^M] しか認められなかったのに、その後にも「も」(と同類のアクセントを持つ助詞)が付いた場合 [(…C)V^Mモ] ~ [(…C)VM[°]モ] のゆれを見せ、かつ [(…C)V^Mモ] の方が自然であると考えられる点に関しては音節的性格が顕著だといえる。

これらのことから考えて、志津川町方言は東京方言と較べて、より音節的性格が強いといえる。とはいうものの、前述の通り音節単位だけでは律し切れない現象があり、完全な音節単位とも言い切れない。

以上の考察を通して、音節単位かモーラ単位かは長音節の扱いに問題点のあるのは当然であるが、たとえ体系において音節単位が設定され、そのこと自体が合理的で矛盾はなくとも、音調の実質において、もしくは体系と実質を結び付ける過程において、モーラ単位を必要とするかどうかを検討する必要がある^{注14}、またそのことを通して、より音節寄りか、よりモーラ寄りかということの方言による違いが見られるらしいということが言えるであろう。

6. 無標の語の下がりについて

ここまでは音韻的に有意味な標識をめぐって記述をすすめてきたが最後に(1)(2)に示した無標の語に現れる下がる音調についてこれも音節を単位としていると解釈した方が有利と考えられる点について説明を施しておく。

これまで音調の幅(下がりであれ上がりであれ)については説明を省略してきたが、実は有標の下がりとは無標の下がりとは下がる幅に差があるようだ。2音節語で顕著にわかることであるが、当該方言の標識の下げ幅は、東京方言の核の下げ幅を5とすれば、それよりも狭くて概ね4~3ぐらいであって、しかも無標の下げ幅はさらに狭く2~1ぐらいであり、かつ音節数の多い語ほど無標の下げ幅は狭くなるように聴かれる。先に(5)に示したように標識(//)の前の上がる音調は消えることがあるが(語頭の音節に標識のあるものでは上がる音調は現れない)、その際も含めて、

(23)

無標：毛。ケ[°] 水。ミ^ゝズ 釣瓶。ツル^ゝべ 腰掛。コスカ^ゝゲ

有標：火。ヒ[°]① 春。ハ^ゝル① 兎。ウサ^ゝキ② 松茸。マズダ^ゝゲ③

のように無標の語と次末音節に標識を担う語(但し、1音節語では①)がよく類似するということが生じてくる。1音節語では実際、区別が無い。2音節以上の語ではミニマルペアなどで試してみると下げ幅の違い(または無標の語には下がりのない(4)の“~”の右の形が現れ標識の有無)で区別され中和することはないようだが、現実には助詞付きで(しかも文頭に置き述部を後続させて)聴いてみないと大変紛らわしい。この現象自体は無アクセント化への契機とも考えられ注目すべきである。

さて、この音調が末尾に長音節を持つ無標の語に現れると次のようである。

(24)

棒。ボ^ゝー 名前。ナマ^ゝエ 復習。オサラ^ゝエ

このように後ろから2モーラ目の上に現れる。例えばすぐ上に示した(23)と較べても現れる場所の指定は句末第2モーラの上という指定で充分なように見える。また、後ろから2つ目のモーラがモーラ音素で無標の語には、

(25)

水。コー^ゝリ 病人。ヤマエ^ゝド お返し。オガエ^ゝス

のように現れ、これを(24)と較べると語の長さや位置は対等ではないけれどもあたかも[(C)V^ゝM] : [(C)VM^ゝ]の対立があるように見える。つまり無標の下がりの現れる場所の指定はモーラ単位なのではないかと思われるのである。しかしながら、指定の単位をやはり音節としておいた方が有利と思われる次のようなゆれが(24)には存在する。

(26)

名前。ナマ^ゝエ~ナ^ゝマエ 復習。オサラ^ゝエ~オサ^ゝラエ

また(26)の“~”の左の形は長音節内の下降と捉えられるが、末尾が短音節の語も下がりが音節内下降となることもあり、実際は長音節も短音節も本質的に変わるものではない。

このことから無標の語に現れる下がりも音節を単位として、句末尾の1音節を下げてと記述してよいであろう。

7. む す び

以上のように、当該方言の名詞のアクセントは/¹/を標識として、音節を単位とし、制限はあるものの、n音節語にはn+1個のタイプがあることを明らかにした。アクセント体系において音節単位であるといってもそこにモーラ単位的性格がないわけではないこと、そのモーラ単位的性格をめぐって同じように音節単位的性が指摘されてきた東京方言との位置付けの違いについても言及した。

また、当該方言には無標の語にも標識によく似た下がる音調が現れるが、このいわば音韻的には無意味と考えられる音調も音節を単位として指定されるべきこともあわせて検討した。

その他の品詞についても同様に音節を単位としていると予想されるが用言では語形変化を考慮する必要がある分、記述方法をくふうしなければならない。また、音節的/モーラの位置付けをめぐって北部に連なるシラビーム方言との関係や、通時的な問題において南部に接する無アクセント方言とのつながりといった点も課題として残されている。

注1 志津川町は宮城県北部、三陸海岸のほぼ南端に位置する町で昭和52年に気仙沼線の開通するまでは主だった交通路もなく「陸の孤島」とも呼ばれていた。

注2 基本的というのは「読み上げ式」の調査の時点で最も頻繁に聴かれた形について言う。ゆえにこの形が自然であるとは限らない。その点については本文の3.の後半で言及した。

注3 語形は読み易さの便宜を配慮してカタカナ書きにした。なお半濁点でガ行鼻濁音を表わした。また、ア段の字に“エ”が続くものは/ ε R/を示し、/ ε /は常に/R/を伴うので“エ”自体は長音に相当すると見てよい。また、語中の/d, z/は鼻音を伴うことがあるが、表記は省略した。なお、音韻表示は/ /、音声表示は[]でくくったが、用例(1)~(26)の中では[]は省略している。

注4 ここで「ゆれ」といったのは、調査の時点で、幾様にも発話され、かつこちらからの発話に対しても話者の許容が認められたものについていう。もちろん「ゆれ」にはここに示した形の間の中間的なものも存在するが、ここでは「ゆれ」の両端を示した。

注5 柴田武(1955)、上野善道(1975, 1977)等。

注6 2モーラ目が無声母音の[ポ¹スト, マ¹スク, レ¹ストラ¹ン]等は例外に見えるが、いずれも/pos¹-to, mas¹-ku, res¹-to-raN/のように第1, 第2モーラをCVCの閉音節と解釈すれば例外ではなくなる。

注7 標識が/Q/の前にあるか後ろにあるかを話者がどう意識しているかは不明であるが筆者には[(C)V¹Q]に聞こえる。なお[(C)VM¹]が自然な形であるというのは東北方言では珍しい形ではない。例えば、上野善道(1980)の岩手県雫石町方言は標識は/¹/であるが、その直後に語単独発話で現れる[¹]は語末以外でモーラ音素の上にある。

注8 いわゆる文節アクセントという考え方ならば、3音節以上にも「春も」[ハ¹ルモ]、「春まで」[ハ¹ルマデ]という語頭が短音節の頭高型が認められるといった記述もなされるかもしれない。しかし、ここでは単語レベルで記述をすすめているのであるから、レベルを異にする文節

(48) 宮城県志津川町方言の名詞のアクセント

アクセントとは同等の扱いはできない。なお、4音節語の①としては、「ターミナル」, 「代替り」等の語例がある。

- 注9 これに類似した記述方法として山口幸洋(1984)は同様に①への制限を持つ静岡県舞阪町方言について[(C)V¹M...]を相補分布とみて②に分類している。なお当該方言は[(C)VM¹...]が自然と考えられる点で舞阪町方言とは性格が異なる。
- 注10 周辺の岩手県方言と比較すると、おそらく一時代前にs¹O¹…>sO¹…という変化があり、S¹O¹…が取り残されたのであろうと考えられる。
- 注11 これら「…の」「…まで」の場合も[…(C)VM¹ノ], […(C)VM¹マデ]もある点は3.(10)に示した事象と同様である。
- 注12 東京方言のアクセントの音節的性格を述べた先行研究については上野(1984, p.50)に紹介がある。
- 注13 基底で長音節が標識を担っている語に関して、東京方言では、いったんモーラ音素の前に核を移す規則が必要(基底マン¹ゲツ⇒表層マ¹ンゲツ)だが、志津川町方言ではそのまま表層へ導き出せる。
- 注14 当該方言における語頭の標識を担う音節に対する制限も「長音節を1個有する2音節以上に長い」とするよりも「3モーラ以上」とした方がはるかに簡潔であり、当該方言でも「数える単位」(早田輝洋1977, 1986)としてモーラ単位を設定すべきなのかもしれない。(11)が/O¹/に*/s¹S/がないことを表わし得ていないのはそのことに関連する。このような観点からもモーラ単位性を考慮する必要がある。
- 注15 語頭の急な上がりも聴かれないうし、例えば、①の「春」に無標の連体詞「この」を付けても[コノハ¹ル]であって*[コノ¹ハ¹ル]のような現れ方はしない。
- 注16 もっと南のあいまいアクセント地域では、(0でモーラを示すと)2モーラ語の語単独発話にのみ[0¹0]:[0(¹)0]という形での区別が見られることが知られている(平山輝男, 前掲, p.495 ff., 佐藤亮一1963, 筆者自身も1984年に仙台市田子地区の生え抜きの明治44年生まれの女性にその事象を認めている)。今、2モーラ語の語類別について佐藤(1963)の報告をもとに仙台市小鶴を志津川町と較べてみると、
小鶴: I II, IV V (一部) [0¹0]/III IV V [00]
に対して、
志津川: I II①/IV V (一部) ①/III IV V②
であり、小鶴において[0¹0]と報告されているIV V類の多くが志津川では①である。そもそも志津川町方言のIV V類で①である語は少ないのであるから、この対応はやはり歴史的関係を想定させるものである。つまり志津川のI II類(①)とIV V類のうちの①の語が統合したということである。(但し、IV V類①のうちの一部は②に変化した過程もあろう。)そして、その統合にあたって無標の語に現れる下がる音調が①を①に類似させる要因となつたのではないかと考える。なお平山(前掲, p.485)もこの無アクセント化への契機という問題を示唆している。
- 注17 但し、この場合[…(C)V¹M]は[…¹(C)VM]に較べるとかなり安定しており、程度差とはいいながらここでも長音節と短音節との間に違いがみられる。

(文献)

- 上野善道(1975):アクセント素の弁別的特徴,『言語の科学』6
——(1977):日本語のアクセント,『岩波講座日本語5.音韻』
——(1980):アクセントの構造,『講座言語1.言語の構造』(大修館書店)

- (1984)：地方アクセントの研究のために、『新しい方言研究』（至文堂）
- (1986)：伊吹島方言のアクセント核の担い手、『東京大学言語学論集'86』
- 佐藤亮一 (1963)：宮城県における多型アクセントの南限——主として二音節名詞について——、『芸学研究』45
- (1966)：宮城県北部における三音節名詞のアクセント、『国語学研究』6
- 柴田 武 (1955)：日本語のアクセント体系、『国語学』21
- (1962)：音韻、『方言学概説』（武蔵野書院）
- 早田輝洋 (1968)：日本語諸方言のアクセント、『文研月報』18-10
- (1977)：日本語の音韻とリズム、『伝統と現代』45
- (1986)：アクセントの単位——特にその担い手について——、『文学研究』83
- 平山輝男 (1957)：『日本語音調の研究』（明治書院）
- 山口幸洋 (1984)：アクセント体系が捨象したもの——静岡県舞阪町方言を例として——、『現代方言学の課題』第2巻（明治書院）

〔付記〕

本稿は国語学会昭和63年度秋季大会（弘前大学）で口頭発表したものに加筆，修正したものである。

——東北大学助手——

（昭和63年11月29日 受理）